研究課題　松尾大社所蔵史料の調査・研究

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　野村朋弘（京都芸術大学・准教授）

　所内共同研究者　畑山周平・村井祐樹・高島晶彦

　所外共同研究者　角田朋彦（駒澤大学・非常勤講師）・佐々木創（京都芸術大学・非常勤講師）

研究の概要

（１）課題の概要

　本研究は京都市西京区に鎮座する松尾大社の史料群について、調査・研究するものである。松尾大社は国家祈祷を行う二十二社の一つとして、朝廷及び歴代の幕府から崇敬を受けており、古代から近代まで豊富な史料を有している。松尾大社には代々社家を勤めていた東家・南家があり、家ごとに所有していた文書群が近代になってから神社へ寄託された。現在、松尾大社には約二〇〇〇点の史料が所蔵されている。史料編纂所においては戦前及び戦後に史料採訪を実施し、影写及びマイクロ写真撮影が行われていた。しかし神事注文や次第といった冊子形態の史料の紙背文書の多くは採訪時に史料が修補されておらず、調査・撮影がされていない。また現在、松尾大社では神社誌の一環として活字史料集が刊行されているものの未翻刻史料も多くある。更には二〇一九年の共同研究において、新たに未調査・新出の史料があることを発見した。そこで本研究では撮影されていない史料を中心に調査・撮影を行い、松尾大社が所蔵する資料群の全体像の把握に努めたい。併せて各時代で豊富な史料を有しているため、料紙の科学的調査のデータ収集対象としても貴重である。それらの基礎的な情報を学界共有の財産として公開し、神社史研究に新たな視座を提示する

（２）研究の成果

　今年度の共同研究は、新型コロナウイルスの感染拡大のため、調査回数や人数など大幅に制限がなされ、予定を変更せざるを得なかったものの、松尾大社の許可を得て一〇月に調査及び撮影を実施することが出来た。以下は今年度の調査において得られた知見である。  
調査において松尾大社史料の目録化がなされている文書の撮影・調査の他、中世から近代にかけての史料群を閲覧することが出来た。調査日程が短かったため、総数などの把握は次年度以降の課題としたものの、大まかな分類を行い、特に中世の史料については三点確認し撮影を行った。  
　また松尾大社が所蔵している「松尾神社及近郷絵図」の近代の模写も発見された。明治期に入ってから社家である東家・南家が神社運営や祭式に関わらなくなる中で、社家が保有していた史料群を神社が収集・所蔵し、模写などを作成する経緯も明らかとなった。  
　神社が所蔵する史料群のあり方については、研究代表者である野村が神道史学会の大会にて研究報告を行った。